

日本語教育能力の判定に関するワーキンググループの検討状況（案）

0. 現状と課題

(1) 日本語教育を取り巻く状況

- ・在留外国人が近年急増している
- ・日本の労働力人口は減少が続く見込み
- ・新たな在留資格（特定技能）の創設
- ・在留外国人は当面増加傾向が続くと見込まれる
- ・在留外国人の日本語能力は多様

(2) 日本語教育の必要性

- ・外国人が日本で日常生活及び社会生活を円滑に営むことができる環境の整備のため、日本語教育が求められている。
- ・外国人が日本で社会の一員として自立した生活を送るためには、一定の日本語能力を習得してもらう必要がある。
- ・日本語能力が不足する外国人が今後も一定数存在すると見込まれる
- ・日本語能力を更に伸ばしたいという外国人のニーズに応えていく必要性
- ・外国人に対する日本語教育は今後も必要

(3) 日本語教師を取り巻く状況

- ・日本語教師の人数，その内訳（常勤・非常勤・ボランティアの別，年齢層等）
- ・日本語教師の活動の場
- ・日本語教師の資質・能力を担保する仕組みが十分とは言えないのではないか
- ・日本語教師の養成の現状（人数，講座数等）

(4) 日本語教師の資質・能力を向上する必要性

- ・外国人の日本語教育に対するニーズは多様であるが，どのような教育の場でも教育の質を上げるためには日本語教師の資質・能力を上げることが不可欠
- ・一定の水準を満たした日本語学習機会が全国において得られるようにするためには，日本語教育を行う日本語教師の資質・能力の向上が急務
- ・外国人に対し，その希望，置かれている状況及び能力に応じた日本語教育を提供するためには，一定の専門性が担保された日本語教育人材の確保が必要

(5) 日本語教師の資質・能力の向上のための課題

- ・日本語教師の類型化（養成・初任・中堅・日本語教育コーディネーター）
- ・養成課程や研修の教育内容及び質が均質でないため，養成された日本語教師の資質・能力にばらつきが生じている
- ・日本語教師の資質・能力を正面から担保する公的な仕組みがない

- ・日本語教師の資質・能力を担保する機能を代替している告示校の教員要件の見直し
- ・日本語教師が資質向上に向けた努力を行う際の目標やきっかけとなるような公的な仕組みがあると良い
- ・ボランティアとして日本語教育に携わっている者の資質向上のための課題
- ・日本語教師に対する研修機会の地域間格差がある
- ・大学や大学院等の高等教育機関における日本語教師養成課程が減少傾向にある

1. 資格の目的・意義

(1) 日本語教師の資質・能力の向上のための課題解決の方策

- ・日本語教師の養成の仕組みに公的な位置づけを与え、社会的信頼性を高める
- ・教育実習を受けることが必要ではないか
- ・企業や事業者における就労のための日本語教育の担い手を確保し、資質・能力を向上する
- ・地域における「生活者としての外国人」の日本語教育に携わるボランティアの負担を軽減し、日本語学習環境の整備につながる
- ・日本語教師を専門的な職業として位置づけることにより、日本語教師養成の体制を強化し、業界全体の質の向上につなげる

(2) 日本語教師の資格創設の必要性

- ・職業として日本語教師をしている者の資質向上のために考えられる方策を一つの仕組みで解決するためには、公的な資格制度を設けることが最も効果的
- ・日本語教師が資格となることで、職業としての社会的な認知が高まり、それにより日本語教師の社会的地位の向上が期待できる。
- ・若い人たちが日本語教師を職業の一つとして捉えてもらうことにつながるのではないか。
- ・企業等が専門家としての日本語教師を雇用する際の判断基準を明確にするために資格の創設が有効かつ急務である。
- ・海外における日本語学習熱の高まりを受け、世界中で日本語教育の需要が増している。専門性を有する日本語教師を派遣することにより、海外での日本語のプレゼンスの向上に繋がる。
- ・日本が外国人材受入れを表明する上で、コミュニケーション支援の実施体制として有資格者による教育の質の担保は、受け入れる外国人及びその家族にとって大きな安心となる。

(3) 日本語教師の資格制度の目的

- ・日本語教師の資格制度の目的を整理すると次のようになる
 - a) 職業として日本語教師をしている者が自身の能力を証明することが容易になる
 - b) 留学生等が日本語教育機関を選択する際の目安となる、安心できる
 - c) 地方自治体や企業、学校等が日本語教育の専門家の協力を得る際の目安となる
 - d) 職業として日本語教師をしている者や目指している者が自らの資質能力を向上させる際の目標やきっかけとなる
 - e) 公的な資格とすることによって日本語教師の社会的地位が向上することに加え、日本語教師の社会的認知度が向上する。
 - f) 公的な資格とすることによって海外の教育機関や企業が日本語教育の専門家の協力を得る際の目安となる
 - g) 日本語教育の質の向上を通じて、外国人が我が国で活躍し、安心して生活できる基盤を構築する

2. 資格の名称・有効期限

(1) 資格の名称

- 「日本語教師」という名称は、社会的認知を維持・拡大するために残してはどうか。
- 国内外の多様な機関で用いられるよう、例えば「公認日本語教師」としてはどうか。
 - ・「公認日本語教師」と「日本語教師」が両立することになり、紛らわしくないか。
 - ・海外でも活用できるよう、また外国人にも分かりやすく、英語の名称も同時に考えてはどうか。
 - ・この資格がないと海外では教えることができないといった誤解を生まないような配慮が必要ではないか。

(2) 資格取得（登録）の要件（試験＋教育実習＋その他）

- 日本語教師の質が問われている現状において、平成30年報告に示された資質・能力を判定するための資格とすることが重要ではないか。
- 原則として何らかの試験で専門家としての日本語教師としての一定の知識を確認することが必要ではないか。
- 試験合格者については、教育実習の受講を必須要件としてはどうか。
- 法務省告示校に在籍する留学生の大半が高等教育機関に進学を希望する者であることから、日本語教師の要件の一つとして、学士の要件を含めるべきではないか。
- 資格として一定の専門性と実践研究能力を担保する観点から学士相当とすることが適当ではないか。
- これからの時代、多様な国籍、ニーズ、背景を持つ外国人に教育者として向き合い、

対応できる人材である日本語教師には、幅広い教養と問題解決能力が必須の力であり、大卒を要件とすることは適当である。

- ・海外に日本語教師として赴く際、ビザの要件として学士を求められる。日本語教師が教授職として海外で活躍する上で、国際標準の観点からも学士は必要ではないか。
- ・資格の対象を明記したほうがよいのではないか。(海外を除くかなど)
- ・試験合格から登録までの期間を定める必要があるのではないか。

(3) 登録の方法・体制

- 資格取得要件を満たす者を登録する制度・機関を定めること

(4) 資格に有効期限を設けるかどうか

(5) 資格の更新要件を設けるかどうか

- 日本語教師の質の維持の観点から、有効期限を設けることが望ましい。
- 時代や施策の変化に対応できるように基本的な知識をアップデートしてもらうために更新講習を受ける必要がある。
- 有効期限を過ぎると失効するものでなく、更新講習等を受ければ期間が延長されるようにしてはどうか。
- 更新期間は教員免許に準じて10年程度が妥当ではないか。
 - ・一定期間実務経験がない者や、実務経験が少ない者については、特に更新講習を必須としてはどうか。

(6) 欠格事由

- 他の資格同様に、欠格事由についても定めるべきではないか。
- 教育関係の資格の一般的な欠格事由を参考としてはどうか。

3. 試験の内容

(1) 試験が備えるべき要件

- 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」で示された「必須の教育内容」に基づくものとする。
- 日本語教師の養成段階で求められる基礎的な内容に限定すべきではないか。
 - ・試験の内容のほか、試験の方法についても併せて議論すべきではないか。(筆記試験・記述試験・聴解試験など)
 - ・資格試験として合格水準が一定となるよう定める必要があるのではないか。

(2) 試験の実施方法・体制

- 受験機会を確保するため、受験回数、受験地域について検討が必要ではないか。
- 受験回数は複数回、受験地域も全国6地域以上が望ましいとしてはどうか。
- オンライン受験の実施についても将来的には検討してはどうか。
- 資格要件となる試験であることから、実施機関を一つに定め、不正等がないよう、また安定的な管理運営が可能となるよう要件を設けることが必要ではないか。

4. 試験の受験資格

- 受験資格は設けないこととする。
例えば、大学在学中に受験・合格し、大学卒業と同時に、登録要件を満たした上で、登録することは可能。

5. 教育実習

(1) 教育実習を必須とすることとしてよいか

- ・原則として教育実習の履修を必須としてはどうか。
(実務経験等については、(7)において検討)
- ・日本語教師という職業を選択する上で、教育実習を経験することは具体的な仕事のイメージを捉え、日本語教師という仕事の魅力を体験することにも繋がることから、日本語教師数の確保の観点からも有効ではないか。
- ・試験で測れるものは知識であり、コミュニケーションを通じてコミュニケーション学ぶという日本語教育の特性を理解する日本語教師の実践力の養成には、教育実習は必要不可欠ではないか。
- ・日本語教育では、言葉が通じない学習者に対する教授方法が求められることから、実際の教育現場で多様な教授法と接することが有効ではないか。

(2) 教育実習の仕組み

① 現行の大学や日本語教師養成研修実施機関における教育実習について

- ・大学の課程において、学内及び大学が認めた外部教育機関等において教育実習を実施し、大学が単位認定を行うことで良いのではないか。
- ・文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関において、当該機関が認めた教育実習実施先については、所定の教育実習プログラムを終了し、成績評価を行うことで良いのではないか。

- ・資格化に伴い、教育実習の対象者（学習者）や実施機関、指導体制について、より厳格に定めることを検討する必要があるかどうか。
- ・教育機関によって教育実習の内容や質に大きな差が生じないように配慮すべきではないか。

②試験合格者（所属なし）に対する教育実習の仕組みについて

- ・資格の制度としては、①と同等の教育の質が担保できる仕組みである必要があるのではないか。
- ・教育実習実施機関は、教育の質を担保する観点から、指導が受けられる体制を備えた教育機関（大学及び文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関）であることが適当ではないか。
- ・教育実習現場については、大学や文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関が用意した機関・団体としてはどうか。
- ・実習のみを提供する場を教育実習実施機関として個別に活用することは考えられないか。その際、その場が教育実習実施機関と同等と見なせる基準とはどのようなものか。また、大学及び文化庁届出受理日本語教師養成研修実施機関と同等の、教育実習実施機関になりえる場として、具体的にどのような機関・団体が考えられるか。
- ・教育実習ではなく、実務経験を設定するとしては、どうか。⇒（7）へ

（3）教育実習の要件・指導項目は「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）」に示された内容でよいか

- ①オリエンテーション
- ②授業見学
- ③授業準備（教案・教材作成等）
- ④模擬授業
- ⑤教壇実習
- ⑥教育実習全体の振り返り

- ・教育実習の流れとしては、報告に示された①～⑥の内容で良いが、授業形態（クラス授業やグループ、マンツーマン等）や、活動分野別の日本語教育の現場を選択的に経験できるようになると良いのではないか。
- ・多様な教育の現場に触れる機会を得ることも大切だが、教育実習としては一般的なクラス型式の授業を経験することも重要ではないか。
- ・どのような活動分野で日本語教育に携わるかによって、教育実習の型式が選択できるよう幅が広がるのが受講者にとっては望ましいのではないか。そのため、実習の形態を限定的にするのではなく、教育実習実施機関が独自に多様な教育実習の現場

を用意するようにすることがよいのではないか。

- ・メディア（同時双方向性が確立している場合に限る。）を利用して行う教育実習について、資格の対象とすることがどうか検討が必要ではないか。

（４）時間数は、１単位（４５単位時間以上）としてよいか

- ・教育実習の時間数は最低基準を示すこととし、教育機関の裁量に任せることが適当ではないか。
- ・大学の副専攻において、１単位以上の教育実習を設定することは現実的とは言えないのではないか。
- ・教壇実習では、実際の教育現場における日本語の指導時間である１コマ（４５分程度）の指導を経験することが望ましいのではないか。

（５）教育実習実施機関及び実習現場の確保のための措置

- ・教育実習実施機関は、教育の質を担保する観点から、指導が受けられる体制を備えた教育機関（大学及び文化庁届出受理日本語教師研修実施機関）で対応することが適当ではないか。
- ・実習現場として、留学生だけでなく、「生活者としての外国人」や就労者や児童生徒等多様な対象に対する日本語教育を行う教育機関が、教育実習実施機関によって選定され、多様な教育現場に接する機会が得られるようになることが望ましい。
- ・教育実習の現場が海外ということも認められるか検討が必要ではないか。

（６）養成課程・研修実施機関等教育実習実施機関（送り出し側）における指導の在り方

- ・（３）を踏まえ、教育実習の送り出し機関は、予定する教育実習のカリキュラムの実施及び安定的な運営が可能となる教育実習現場を適切に選定し、当該機関における実習の流れ及び評価についても明確に定めた上で、実習先を決定する必要があるのではないか。
- ・教育実習実施機関である大学が、（３）の教育実習の指導項目①～⑥の全てを実習現場（日本語学校等）に依頼することによって、教育実習現場となる機関に相当の負担が生じる場合がある。教育実習実施機関と受け入れ機関がそれぞれ①～⑥の役割分担を明確にしておく必要があるのではないか。

(7) 実務経験を有する者について配慮が必要か

- ・ 現行の法務省告示の教員要件を満たす日本語教師については、経過措置で対応することとして良いのではないか。
- ・ 実務経験をもって教育実習を履修したとは見なさないこととしてよいのではないか。
- ・ 実務の証明は困難であることから、原則として今後新たな資格の対象となる者については、教育実習を受けることを求めることとしてはどうか。
- ・ 自己流で何年か実務経験を積んだとしても、そのことによって日本語教師に求められる資質・能力、特に実践力を身に付けたと言えるわけではないのではないか。

6. その他の要件

(1) 学歴や科目履修等について

(2) 資格の登録要件として、年齢・国籍は問わないこととしてよいか

- ・ 例えば、未成年であっても、資格登録ができるとしてよいか。

7. 経過措置

(1) 現行の法務省告示基準の教員要件を満たす者について、どのような措置を行うことが適当か

(2) 新たな資格制度への移行に伴い、何らかの条件を設けるか

8. 試験の一部免除の導入の可能性

(1) 大学（主専攻・副専攻）・民間養成研修に、個別の試験一部免除を導入するか

- ・大学の場合、主専攻 45 単位以上と副専攻 26 単位以上とがある。両方を同一条件にするのは適当か。主専攻修了者は、試験免除で資格登録できるようにしてはどうか。
- ・大学の日本語教師養成課程については、教育内容を含めて大学の裁量に任されている状況であり、ばらつきが大きい現状があることから、主専攻の課程に対して試験免除とすることは、資格の質の観点から適切ではないのではないか。
- ・試験免除とする課程については、質を担保する観点から、当該課程に対する教育内容や教員要件などについて一定の要件を定めた上で、認める必要があるのではないか。
- ・資格の制度を構築する上で、将来的な日本語教育の研究者層の厚み・深みを生み出し、実践的学問的な位置づけを高めていくことについても考慮すべきではないか。
- ・公的な資格として位置づけるのであれば、等しく開かれた制度とすることが必要ではないか。

(2) 試験の一部免除を行う場合、一部免除を行う範囲について

9. 更新講習（仮）の考え方

(1) 更新講習の実施等の仕組みの導入の可能性について

(2) 更新講習の要件について

(3) 教育内容について（例. 「必須の教育内容」の中から選択受講等）

(4) 研修実施機関及び実施体制をどのようにするか

10. 現職の日本語教師（初任・中堅）・日本語教育コーディネーターに対する研修の推進・拡充